鼻前庭嚢胞の2例

鈴木啓介・内田昌宏・高野伸夫・木村利男
黄 国和・重松知寛・井上 孝*

Two cases of nasal vestibular cyst

Keisuke SUZUKI・Masahiro UCHIDA・Nobuo TAKANO・Toshio KIMURA
Kunikazu Ko・Tomohiro SHIGEMATSU・Takashi Inoue*

緒 言

鼻前庭嚢胞または鼻齒槽嚢胞は鼻前庭部および鼻翼附着部の軟組織内に形成される嚢胞である。本症に関する報告は耳鼻科領域では数多くみられるが、歯科口腔外科領域では比較的少ないようである。わたくしたちは鼻前庭嚢胞と思われる2例を経験したので、ここに報告する。

症 例

症例1

患 者：61歳 女性。

初 診：昭和47年9月■日。

主 訴：左側下頬部と右側鼻翼基部の腫脹。

家族歴：特記すべき事項なし。

既往歴：昭和37年義歯装着。左側下頬部に義歯による咬創ができたが、そのまま放置。その後、その部分が腫脹し始め、徐々に大きさを増してきた。昭和47年7月末、某歯科を受診した際、本科を紹介され、9月来院。また右側鼻翼部の腫脹は約1年前（昭和46年頃）より自覚したとのことである。

現 症：全身所見；体格栄養ともに良好。

口腔外所見；左側下頬部に比較的境界の明瞭な弾性軟、小鶏卵大の腫脹がみられたが、同部皮膚は健康色を

写真1 症例1の術前顔貌所見

左側下頬部および右側鼻翼附着部に軽度の腫脹がみられる。

写真2 症例1の術前鼻前庭部所見

右側鼻前庭部に膨隆がみられる。

東京歯科大学口腔外科学教室第2講座（主任：高橋庄二郎教授）

* 東京歯科大学病理学教室第2講座（主任：山村武夫教授）

The Second Department of Oral Surgery, Tokyo Dental College (Director: Prof. Shojiro Takahashi)

* The Second Department of Pathology, Tokyo Dental College (Director: Prof. Takeo Yamamura)

受付日：昭和54年10月2日

写真3 症例1の左側の部血管腫の術前写真

写真6 症例1の左側血管腫摘出後10日目の所見
左側頬粘膜部組織欠損部に右側頬粘膜の遊離移植を行った。

写真4 症例1の術前口腔内所見
右側上顎側切歯および犬歯相当部の齦唇移行部に拇指頭大の膨隆が認められる。

写真7 症例1の摘出血管腫のX線写真
多数の静脈石がみられる。

写真5 症例1の術前口腔内X線写真所見
32| 部に骨の吸収像は認められない。

呈していた(写真1)。また右側鼻翼付着部に拇指頭大、弾性軟の腫脹が認められ、さらに右側鼻前庭部が軽度に膨隆していた(写真2)。しかし同部皮膚および粘膜は正常色を呈していた。

口腔内所見：上下顎とも無歯顎で、左側小臼歯および大臼歯部の齦唇移行部から頬粘膜部にわたって鶏卵大、弾性軟の腫脹がみられ、被覆粘膜の一部は紫紅色を呈していた(写真3)。また右側上顎側切歯および犬歯相当部の齦唇移行部に拇指頭大の膨隆が認められた。同部粘膜は健康色を呈していたが、軽度の圧痛があった(写真4)。

X線写真所見：オルソパントモグラフおよび後頭前頭位X線写真において、左側頬部に大小種々の、ほぼ円形の不透過像が認められた。上顎前歯部の口腔内X線写真では同部の骨に吸収像はみられなかった(写真5)。

臨床検査所見：血液、尿検査ともに異常はみられず、ワッセルマン反応も陰性であった。

処置および経過：以上の所見より血管腫と診断し、まず昭和47年10月、GOP 麻酔下に口腔内より左側頬部の

写真 8 症例 1 の嚢胞手術時所見
嚢胞に接している骨面は血状に吸収している。

写真 9 症例 1 の嚢壁病理組織所見
繊毛円柱上皮により裏装された嚢腔が観察され、上皮下結合組織は細胞成分に富んでいる。

腫瘍摘出手術を行った。本手術において頬粘膜部にやや大きな組織欠損をきたしたため、同部に反対側頬部より採取した全層粘膜片を移植した(写真6)。写真7は摘出物のX線写真である。右側前歯部の病変も、最初は血管腫と考え、経過を観察していたが、腫脹は漸次増大する傾向を示し、口腔内より試験的穿刺を行ったところ、褐色、粘稠な内容液が吸引された。そこで鼻前庭嚢胞と診断し、昭和48年2月■日、局所麻酔下で口腔内より嚢胞摘出手術を行った。すなわち 32111 部において歯槽頂と齦唇移行部の中間付近に歯齦移行部と平行に切開を加え、鈍的に剝離して嚢胞を摘出し、一次閉鎖を図った。嚢胞は骨膜下にあり、鼻腔とは鼻粘膜の1層で境界され

写真 10 症例 2 の術前顔貌所見
鼻前庭部に膨隆は認められない。

写真 11 症例 2 の口腔内所見
左側上顎側切歯および犬歯部の齦唇移行部に軽度の腫脹が認められる。

ていた。また嚢胞に接している骨面は血状に吸収していた(写真8)。摘出物は拇指頭大で、赤褐色を呈していた。術後の経過は良好で、現在まで再発の傾向はみられない。

嚢壁の病理組織学的所見：嚢壁の内面は繊毛円柱上皮で被覆されており、上皮下結合組織は細胞成分に富む線維性結合組織で、豊富な毛細血管が観察された(写真9)。

症例 2

患 者：46歳 女性。

初 診：昭和53年10月■日。

主 訴：左側鼻翼付着部の腫脹。

家族歴：特記すべき事項なし。

既往歴：特記すべき事項なし。

現病歴：昭和49年頃、左側鼻翼付着部に腫脹を自覚し、某耳鼻科を受診したが、歯科受診を奨められ、某歯科で切開排膿を受け、腫脹は一時消退した。しかし昭和53年9月、再び同部の腫脹および圧痛が現れ、紹介されて来院した。なお外傷および鼻疾患の手術を受けた経験

写真 12 症例2のX線写真所見

左側上顎側切歯の根端部に大豆大の骨吸収像が認められるが、鼻翼部付近の骨には異常所見はみられない。

写真 13 症例2の手術時所見
嚢胞は鼻前庭粘膜に癒着していた。

写真 14 症例2の病理組織所見

数層の扁平上皮と粘液細胞を混じた繊維上皮に裏装された嚢胞腔がみられ、上皮下は比較的細胞成分に富む線維性結合組織よりなる。

嚢壁の病理組織学的所見：嚢壁は数層の重層扁平上皮と粘液細胞を混じた繊維毛円柱上皮で裏装されており、上皮下組織は比較的細胞成分と毛細血管に富む線維性結合組織であった(写真14)。

考 察

鼻前庭嚢胞に関する報告は1891年 Bartual¹⁾、1893年 Zuckerkandl²⁾に始まり、本邦では1920年、久保猪之吉³⁾が上顎性粘液腺嚢腫という名称で報告して以来、耳鼻科領域ではかなり多数の報告がみられるが、歯科口腔外科

はない。

現 症：全身所見；体格栄養状態ともに良好。

口腔外所見；左側鼻翼附着部に軽度の腫脹が認められ、圧痛がわずかにあったが、皮膚は正常色を呈していた。鼻前庭部には膨隆は認められなかった(写真10)。

口腔内所見；左側上顎側切歯および犬歯部の齦唇移行部に軽度の腫脹がみられ(写真11)、波動を触知した。試験的穿刺により、淡黄色、半透明、粘稠度の高い内容物を吸引した。

X線写真所見：左側鼻翼部および齦唇移行部に相当する骨に吸収像を認めなかったが、左側上顎側切歯の根端側方部に大豆大の骨吸収像が認められた(写真12)。

臨床検査所見：血液、尿検査に異常はなく、ワッセルマン反応も陰性であった。

処置および経過：以上の所見より鼻前庭嚢胞および慢性根端性歯周組織炎と診断し、昭和53年11月■日、局所麻酔下で嚢胞摘出手術および左側上顎側切歯の歯根端切除術を行った。すなわち11123部の齦唇移行部に切開を加えて、齦唇移行部より鼻翼附着部の粘膜を鈍的に剝離し、嚢胞を一塊として摘出した。その際、嚢壁の一部が鼻前庭の粘膜と癒着していたため、鼻粘膜の一部穿孔をきたした(写真13)。また嚢胞存在部の骨面がわずかに凹陷していた。摘出物は10×13×18mmで赤褐色を呈していた。なお左側上顎側切歯の歯根端切除術は通法のごとく施行した。術後の経過は良好で、術後10か月を経過した現在、術前にみられた鼻翼附着部の腫脹および圧痛は全く消失し、再発の傾向はみられない。

表 1 性別、患側および骨陥凹の有無

性 別		患 側		骨陥凹の有無		
男	女	左	右	有	無	不明
2	22	17	7	16	7	1

表 2 年代別頻度

10歳未満	10～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～69歳	不詳	計
0	0	5	3	2	7	2	5	24

表 3 囊壁の病理組織所見

円柱上皮または絨毛上皮	7 例
扁平上皮	2 例
混合型	13 例
不明	2 例
腺組織	1 例

域の報告は比較的少ない。

われわれは1934年から1977年まで本邦において歯科口腔外科領域で報告された鼻歯槽囊胞ないし鼻前庭囊胞24例について調査した⁴⁻¹⁷⁾。その結果、性別では女性22例、男性2例で、圧倒的に女性に多く、左右側別では右側の7例に対して左側は17例であった。骨の吸収ないし陥凹のみられたものは16例であった(表1)。年齢的には50歳代が7例で最も多く、次いで20歳代が5例で、20歳以下のものは1例のみみられなかった(表2)。囊胞の大きさは、大部分のものが小指頭大ないし拇指頭大であり、囊胞内容液はほとんどのものが黄色または黄褐色で粘稠性を示すものであった。囊胞内面の上皮は記載の明らかなもの22例では混合型が最も多く、次いで円柱上皮または絨毛上皮が7例であり、扁平上皮は2例のみであった。なお腺組織を含むものは1例にすぎなかった(表3)。

本症の発生原因については諸説があるが、大別すると、(1)貯留囊胞説、(2)胎生期器官の残存説、(3)胎生期発生異常説、などである。

1. 貯留囊胞説

Brown-Kelly が1898年、病理組織学的研究より本囊胞は腺排泄管の貯留囊胞であるとした。本邦では1920年、久保により上顎粘液腺貯留によるとされて以来、早川¹⁸⁾、小幡¹⁹⁾、山本²⁰⁾らがこれに賛同している。

2. 胎生期器官残存説

Wingrave は1918年、Stenson 氏管、Scarpa 氏管、および Nicolson 氏管のごとき胎生期の器官の遺残物に注目すべきことを述べた。その後 Grünwald²¹⁾は鼻口蓋管の遺残物に Brüggemann²²⁾は鼻涙管前端部に関係がある

とした。

3. 胎生期発生異常説

Blumenthal²³⁾、Klesthad²⁴⁾らは胎生期上顎突起および側鼻突起の癒合に際し、外胚葉迷入の生ずることを原因として報告し、1921年 Klestadt は34例の胎児について検索し、Gesichtspaltzyste と命名した。この説には賛同者が多く、石井²⁵⁾、代田²⁶⁾、石氏²⁷⁾、小島²⁸⁾、梅村²⁹⁾、石原³⁰⁾、大草³¹⁾、佐藤³²⁾らがこれに賛同している。

われわれが今回報告した症例では、いずれも囊胞の一部が鼻前庭部粘膜と癒着ないし接しており、囊壁に絨毛上皮および粘液細胞がみられ、かつ内容液が粘稠性を示していたことから、鼻粘膜における粘液腺の貯留によって発生したものと思われる。

結 語

最近、61歳女性および46歳女性に発生した鼻前庭囊胞の2例を経験したが、本症の報告は歯科口腔外科領域では比較的少ないように思われるので、本邦文献上より若干の統計的考察を加えて報告した。

本論文の要旨は、第113回日本口腔外科学会関東地方会において発表した。

稿を終えるに当たり、終始ご懇切なご指導を賜った高橋庄二郎教授に深甚なる謝意を表します。

引 用 文 献

- 1) Bartual: Quiste en la fassa nasale. Semons zbl 8: 373 1892.
- 2) Zuckerkandl, E.: Cysten in der Nasenschleimhaut. Normale und Pathologische Anatomie der Nasenhöhle 1: 250 1893.
- 3) 久保猪之吉: 上顎性粘液腺囊腫(新称)に就きて 大日耳鼻会報 26: 262 1920.
- 4) 小野文彦: 鼻前庭囊腫に就いて, 歯科医学 5: 125 1934.
- 5) 横矢幹雄: 鼻歯槽囊胞の1例. 日口外誌 6: 79 1960.
- 6) 河合 幹: 鼻歯槽囊胞の1例. 日口外誌 7: 102 1961.
- 7) 木邑知義: 鼻歯槽囊胞の2例について. 口科誌 11: 268 1962.
- 8) 岡田 孝: 鼻歯槽囊胞の3症例について. 日口外誌 10: 292 1964.
- 9) 近藤栄二: 鼻歯槽囊胞の1例. 口科誌 17: 594 1968.
- 10) 久野吉雄: 鼻歯槽囊胞の2症例について. 日口外誌 16: 406 1970.
- 11) 竹内博之: 鼻歯槽囊胞の1例について. 口科誌 22: 268 1973.
- 12) 佐藤田鶴子: 鼻歯槽囊胞の1症例. 日口外誌

- 19: 100 1973.
- 13) 太田 舜: 鼻前庭嚢胞の1例. 日口外誌 19: 72 1973.
- 14) 石川富治郎: 鼻齒槽嚢胞の1症例. 歯学 62: 423 1974.
- 15) 浅野賢一: 鼻齒槽嚢胞の1症例報告. 岐阜歯科学会雑誌 3: 99 1975.
- 16) 大峰秀樹: 鼻齒槽嚢胞の7症例について. 日口外誌 22: 915 1976.
- 17) 越前和俊: 鼻齒槽嚢胞の1例. 岩医大歯誌 2: 152 1977.
- 18) 早川富之助: 上顎粘液腺嚢腫症例. 耳喉 24: 562 1952.
- 19) 小幡達男: 上顎性粘液腺嚢腫の1例. 耳喉 25: 379 1953.
- 20) 山本 哲: 上顎粘液腺嚢腫並に上顎術後嚢腫各1例. 日耳喉 56: 128 1953.
- 21) Grünwald, L.: Beiträge zur Kenntnis kongenitaler Geschwülste und Missbildungen an Ohr und Nase. Zeitschr f Ohrenheik 60: 270 1910.
- 22) Brüggemann, A.: Zysten als Folge von Entwicklungsstörungen im naseneingang. Arch f Laryngol 33: 103 1920.
- 23) Blumenthal, A.: Über Cysten im Bereich des vestibulum naris. Zeitscher f Ohrenheik 68: 60 1913.
- 24) Klestadt, W.: Embryologische und literarische Studie zur Genese der Gesichtsspaltenzysten und ähnlicher Gebilde. Zeitscher f Ohrenheik 81: 330 1921.
- 25) 石井 正: 鼻前庭外側壁粘膜下ニ生ズル嚢毛圓柱上皮嚢腫知見. 大日耳鼻 33: 328 1927.
- 26) 代田源六郎: 鼻前庭嚢腫ニ就テ. 大日耳鼻 34: 1352 1928.
- 27) 石氏三郎: 鼻前庭嚢腫の一例に就テ. 耳臨 34: 479 1939.
- 28) 小島 録: 鼻前庭嚢腫ニ就テ. 大日耳鼻 46: 1000 1940.
- 29) 梅村正道: 鼻前庭嚢腫症例及びその統計的觀察. 耳喉 22: 301 1950.
- 30) 石原 雄: 鼻前庭嚢腫1症例. 耳喉 24: 216 1952.
- 31) 大草次郎: 鼻前庭嚢腫例. 日耳鼻 56: 279 1953.
- 32) 佐藤イクヨ: 急性炎症々状を呈した所謂鼻前庭嚢腫並に上顎洞を占據した大なる濾胞性歯牙嚢腫. 東京女医大誌 24: 229 1954.